

日本音楽学会 2023 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 2 期採択）

シンポジウム「アジア・太平洋戦争期の滞日ドイツ人音楽家：その活動と日本音楽界への影響」

報告記

酒井 健太郎

令和 5 年度の最終日、2024 年 3 月 31 日（日）に、昭和音楽大学において標記のイベントを開催した。参加登録者は約 100 名、実際の参加者は約 80 名であった。

企画者（酒井）は、10 年ほど前からクラウス・プリングスハイムに関心を持ち、資料・情報を収集してきた。2020 年にラルフ・アイジンガー氏によりプリングスハイムの 3 つ目の評伝 *Klaus Pringsheim aus Tokyo: Zur Geschichte eines musikalischen Kulturtransfers* (München: Iudicium, 2020) が公刊されたことを知って、著者にコンタクトをとったところ、いまはジョーゼフ・ローゼンストックについて調査しており、その一環で近く日本を訪れる予定であるとの返答があった。この機会を捉えて同氏に会って、話を聴きたいと思い立ったのが事の発端である。

その後、アイジンガー氏とともにローゼンストックのプロジェクトを進めているトーマス・ペーカー氏にも相談し、アジア・太平洋戦争期に日本にいたドイツ人音楽家に焦点をあて、彼/彼女たちの日本での活動とそれが日本の音楽界に与えた影響をテーマに据えたイベントを開催することにした。アイジンガー氏、ペーカー氏に加えて、長木誠司氏、高久暁氏、赤塚愛氏に講演をお願いし、沼野雄司氏にディスカッサントとしての参画をご快諾いただいた。せっかくの機会なので関連作品の演奏を聴きたいと考え、ミニ・コンサートも開催することにし、監修と解説を西原稔氏にお引き受けいただいた。出演者には木村優実氏（ソプラノ）、川村沙耶香氏（ピアノ）、山下暁子氏（ピアノ）をお願いすることができた。

さらに、本イベントの独自の取り組みとして、参考資料を配付することにした。多分野からの参加者が予想されたことから、本イベントのテーマに関わる基本的な事項を共有しておくことで、議論をより充実させることができるのではないかと考えたのである。この参考資料の作成・提供を、近現代日本の音楽文化について 20 年以上にわたり研究活動を続けている洋楽文化史研究会に呼びかけ、梶大也氏（主要人物の年譜）、戸ノ下達也氏（日本の音楽著作権史）、西澤忠志氏（日本の対ユダヤ人政策、日本におけるナチズム、日本に亡命したユダヤ人・音楽家）の協力を得られることになった。また、昭和音楽大学が所蔵する「小原・堀田写真コレクション」から、本イベントの登場人物の写真集を作成していただくことになった（吉原潤氏）。

加えてプリングスハイムの3つの評伝（加藤子明・1950年、早崎えりな・1994年、アイジンガー・前出）の記述をもとにした、プリングスハイムの年譜（酒井作成、2022年）を配付することにした。さらに、日本語話者でない登壇者・参加者のために通訳の手配、英訳版の資料の作成をおこなうことにした。

こうしてイベントの枠組みが定まった。規模が大きくなった分、コストがかかるが、ペーカー氏と洋楽文化史研究会が共催者に名を連ねてくださり、また、日本音楽学会と公益財団法人ローム ミュージック ファンデーションが助成金を与えてくださって、経済的にも実現の目処がついた。

本イベントの内容は傍聴記に委ねることにして、ここでは企画・制作・運営者として反省点を記しておきたい。反省点とは、講演が予定より伸びて、ディスカッションとミニ・コンサートを圧迫することになったことと、プリングスハイムとマンフレート・グルリットについての議論が手薄になってしまったことである。これらは事前の連絡・調整がうまくいかなかったことに起因する。多人数に対して多量の情報を複数言語で共有すること、大事なことを強調して説明することの難しさを思い知った。また、この種のイベントで企画者が研究報告なり話題提供なりをしないのは異例だという指摘があった。たしかにそうかもしれない。研究を進めて、成果を報告できるようにしたい。

本イベントの成果についても記しておこう。これまで、滞日ドイツ人音楽家の個々については知っていても、彼/彼女らの横の関係を把握することは難しかったように思う。この点について、本イベントによりいくらか見通せるようになったのではないだろうか。また、ペーカー氏はユダヤ人のアイデンティティのありように言及し、アイジンガー氏は亡命ユダヤ人が戦後にドイツに戻るのには難しいことであったことを示唆した。これらは、滞日ユダヤ人について研究するにあたって踏まえるべきことのように思われる。

また、当時の日本でローゼンストックが肯定的に受けとめられていたという赤塚氏の一次資料をもとにした論究、ハーリヒ=シュナイダーの自伝は興味深い内容を含むが、多分に文学作品的であるという高久氏による注意喚起、著作権使用料を巻き上げた意地悪な人物のように描かれることの多いヴィルヘルム・プラーゲの来歴に光を当てることを通じて、彼には彼の理屈があったのだと感得させた長木氏の講演など、勉強になることが多々あった。

ミニ・コンサートで作品を実際に音として聴くことができたのも大きな収穫だった。こんにちでは取り上げられることの少ない作品を、その歴史的意義に鑑みて取り上げることは、研究者の使命の一つであろう。個人的には、西原氏の解説にあった、プリングスハイムが影響を受

けていた作曲家や音楽理論家の思想が、彼のその時々作品に反映しているという指摘をたいへん興味深く感じた。

総じて、この領域の研究をおこなうにあたって把握しておくべき多くのことが示された会になったと思う。これを糧として今後の研究を進めていきたい。未筆ながら、このようなイベントを実現するために様々にお力添えくださった皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。（なお、このイベントに合わせて、プリングスハイムの教え子、評伝著者、研究者へのインタビュー映像やビデオ・メッセージを集成したビデオを公開しました。YouTubeで「クラウス・プリングスハイム証言集」と検索してご覧いただければ幸いです。）